



# IES (公財) 環境科学技術研究所 News Letter

詳細は  
<http://www.ies.or.jp/>  
Vol.5 (通巻107号)  
2020/11

## 多くの家族連れで賑わいをみせた施設公開



10月25日、六ヶ所村の後援を受け六ヶ所核融合研究所(QST)、青森県量子科学センター(QSC)との同日共同開催で環境施設公開を行いました。新型コロナウイルス感染症流行の影響もあり開催が危ぶまれましたが、例年7月末の開催を延期し、開催にこぎつけました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策としてスムーズな受付や会場整理に関する体制を充実させるため、先端分子生物科学研究センターの公開を取りやめ、環境研本所エリアのみでの公開としました。生物影響研究関連施設として例年順路としてなかった本所にある低線量生物影響実験棟を公開順路に加えたほか、全天候型実験施設では「空気すごいぜ！」と題してCDホバークラフト作りや雲や竜巻に関する科学体験、生態系実験施設特設会場では「細胞が割れる!？」と題して生物影響研究部の研究員による細胞分裂を観察するための試料の処理方法や顕微鏡観察を行う科学教室を開催しました。

また、今年から新企画として「ぬり絵コンテスト」を行い、多くの子供たちから、色とりどりのとても素

敵な作品を頂きました。

天候がすぐれない中でも例年にも増して家族連れの方が多く、特に科学体験コーナーでは賑わいが見られたことや、六ヶ所高校からのボランティアの生徒たちのサポートもあり、とても盛況な施設公開となりました。



科学体験の様子  
(左：CDホバークラフト作り 右：細胞が割れる!?)



ぬり絵の展示



六ヶ所高校ボランティア達と

## 弘前大学との包括連携協定を締結



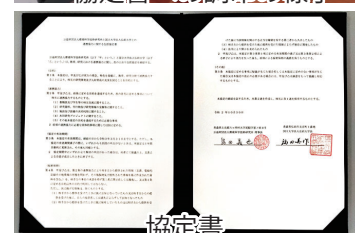
弘前大学との教育、研究における連携協力に関する協定書について、郵送により相互に署名され、令和2年10月30日付をもって締結されました。

本協定は、環境科学技術研究所及び弘前大学が双方の理念、特色を基盤に、教育、研究分野で連携協力することにより、相互の研究開発及び人材育成の充実を図ることを目的としています。

これまでにも当所と弘前大学では、両機関の研究者による共同研究や相互に施設を利用した研究を行ってきましたが、連携協力に関する本協定のもと、研究者や学生との積極的な交流や共同研究、共同施設利用などが更に進み、両機関が相互に発展することが期待されます。



協定書への調印の様子



協定書



## 六ヶ所村内で一般向け、高校生向け講演会を開催



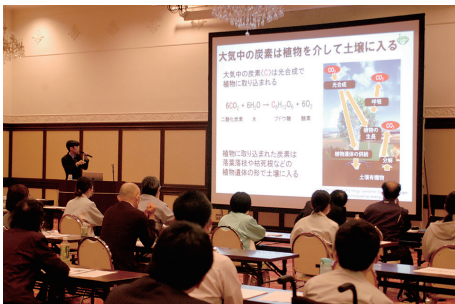
広く一般の方々へ当研究所の研究内容や成果を知って頂くために行っている環境科学セミナーを10月8日に六ヶ所村スワニーで開催しました。当セミナーは六ヶ所村を皮切りに、青森市、弘前市、八戸市の県内主要市で毎年行っているものです。

今年は、元石巻西高校長で2011年東日本大震災では避難所運営の陣頭指揮をとられた経験を持つ齋藤幸男氏をお迎えし、「震災を語り継ぐ ～災害対応と人材育成～」と題してご講演頂きました。また、環境科学技術研究所の環境影響研究部、生物影響研究部からそれぞれ「放射性物質は土壌に蓄積されるのか?」、「色と形から分かる放射線の影響」の報告に加え、むつ市にある(公財)日本海洋科学振興財団むつ研究所の研究成果について報告を行いま

した。本報告会では100名を超える参加者があり、盛況のうちに終わることができました。

また翌9日、六ヶ所高校において「高校生と六ヶ所村のコレカラを考える」講演会を2年生を対象に開催しました。

前日、環境科学セミナーでご講演頂いた齋藤幸男氏から、「災間を生きる君たちへ ～命と向き合い・命をつなぐ～」と題してご講演頂きました。講演では、避難所運営や被災者の精神的な支えとして高校生が活躍したことや、現在起こっている新型コロナウイルス感染症流行や今後起こるかもしれない災害を乗り越え、社会を支える人材になるとともに、生きて命をつないでいって欲しいと熱く語られ、生徒たちは感銘を受けている様子でした。



環境科学セミナーの様子



六ヶ所高校講演会での生徒たちとの記念写真

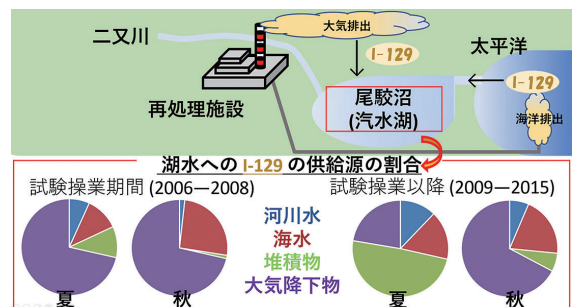
## 「尾駁沼湖水中の放射性ヨウ素の供給源」



Journal of Radioanalytical and Nuclear Chemistry (2020) に論文掲載 環境影響研究部 佐藤 雄飛 研究員

環境研では、再処理施設に隣接する尾駁沼の湖水中における放射性ヨウ素(ヨウ素129)の挙動を継続的に監視しています。本論文では、これまでに取得した2006年から2015年までのヨウ素129の湖水中濃度データ等を用いて、ヨウ素129の各供給源(河川水、海水、大気降下物、沼底堆積物からの溶出物)の寄与の大きさを推定しました。

その結果、ほとんどの時期において大気降下物の寄与が最も優占的ですが、再処理施設の試験操業後(2009年以降)の夏季においては、沼底堆積物からの溶出も比較的大きな寄与を有することが示唆されました。



湖水中の放射性ヨウ素供給源の割合